報道発表資料

東京消防庁　Tokyo Fire Department

平成２３年7月２１日

乳幼児の事故を防ごう
～「救急搬送データからみる乳幼児の事故」の情報提供について～

東京消防庁管内では、平成１８年から平成２２年までの５年間で、不慮の事故により救急搬送された子どもは、４４，２２５人にのぼっています。

当庁では、同様の事故から子どもたちを守るため、この事故データを詳細に分析して、分析結果をもとに事故防止のポイントを記載し、「救急搬送データからみる乳幼児の事故」としてまとめました。

できるだけ多くの方の目に留まるよう、育児関係出版社や、保育園、児童館、保健所などに積極的に情報提供していきます。当庁のＨＰ（http://www.tfd.metro.tokyo.jp/）でも公開予定です。

「救急搬送データからみる乳幼児の事故」をもとに、日常に潜む危険を事前に取り除き、子どもを不慮の事故から守りましょう。

1　乳幼児（０歳～５歳）の事故は、平成１８年から平成２２年までの５年間で４４，２２５件発生しています。年齢別では、１歳で最も事故件数が多くなっています。

2　けがは、「転落」によるものが最も多く、次いで「転倒」、「窒息・誤飲等」と続いています。発生件数は少ないものの「やけど」や「溺れ」は、重症化しやすい傾向があります。

3　事故の多くは住宅で発生していますが、成長するにつれ、自宅以外でけがをする事が多くなってきます。

4　事故防止のポイントを中心に、リスクコミュニケーションの専門家である慶応義塾大学吉川肇子教授の監修を受けています。

5　「救急搬送データからみる乳幼児の事故」は、Ａ４用紙６０枚ほどの資料です。ＨＰには、事故種別や年齢ごとに分け、掲載する予定です。

「救急搬送データからみる乳幼児の事故」の概要として作成したリーフレット「子どもの事故を減らすために」を、別添え資料として添付します。

問合せ先
東京消防庁㈹　電話 3212 - 2111
防災安全課防災安全係　内線 4207
広報課報道係　内線 2345～2349

東京消防庁

監修　慶應義塾大学
教授　吉川肇子

子どもの事故を減らすために

乳幼児に関わる事故を減少させるには、事前に大人がその危険性を取り除く事が大切です。
過去に起きた事故の状況を知り、事前に危険を取り除きましょう！

過去５年間（平成１８年から平成２２年まで）の乳幼児の救急搬送データを分析した結果、以下のような特徴がみられました。

乳幼児の事故は多発している

平成２２年、東京消防庁管内では、不慮の事故によるけがで約１１万人が救急搬送されました。そのうち０～５歳の乳幼児は約８，４００人でした。

乳幼児の事故は大変多く、過去５年間で４４，２２５人が救急搬送され、特に１歳児の事故は、年間平均約２，３００人と、どの年齢よりも多くなっています（**図１**）。

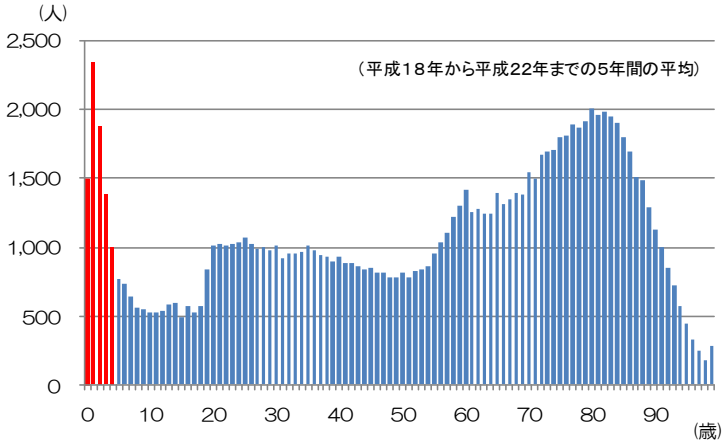

図１　年齢別の事故による救急搬送人員

１歳で多く、特に男児で多い

事故は１歳で最も多く発生しており、その後は年齢とともに減少する傾向が見られます。男児が多いことも特徴です。

また、４、５歳では中等症以上の割合が他に比べて高くなっています。行動が活発化・大胆化していることが一つの要因と考えられます（**図２**）。

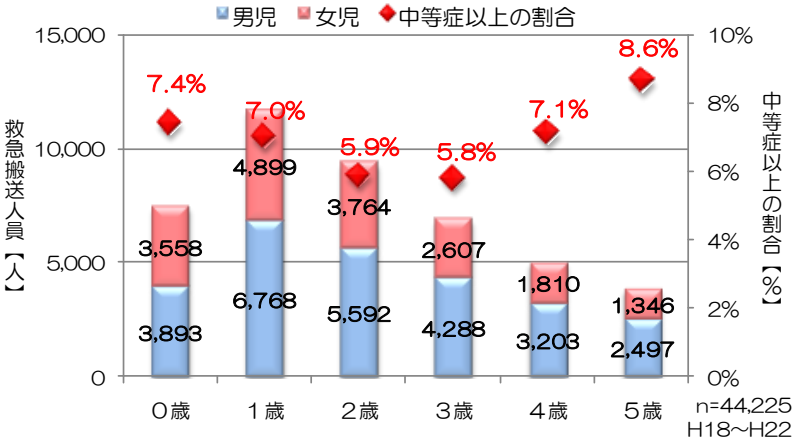

図２　年齢別・男女別救急搬送人員と中等症以上の割合

多くは身近な住宅内で発生

約７０％が身近な住宅内で発生しており、安全と思われている住宅内においても事故の危険性が多く潜んでいることを示しています（**図３**）。

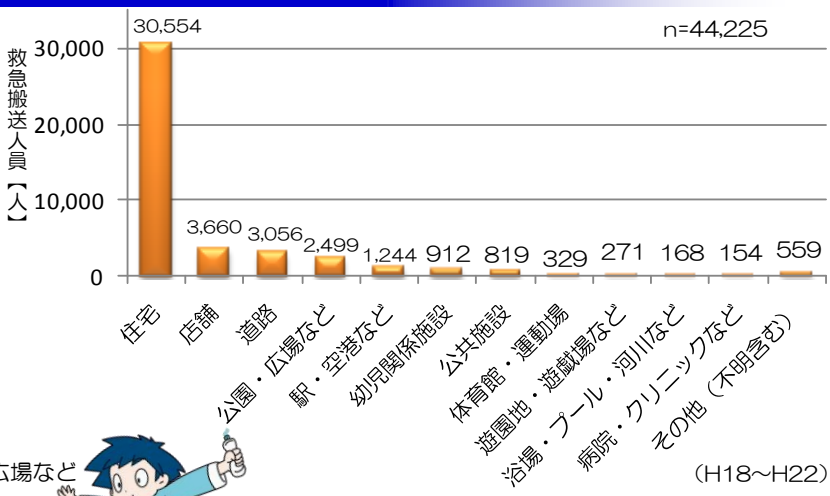

図３　場所別救急搬送人員

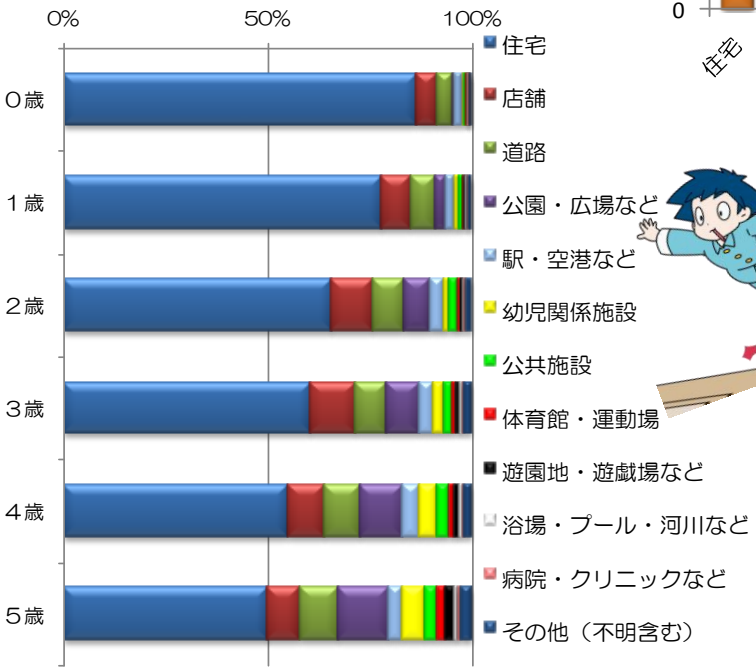

図４　年齢別・場所別救急搬送人員の割合

年齢別に事故発生場所の構成割合をみると、０歳、１歳では住宅がほとんどですが、年齢が高くなるにつれて、屋外での事故が増えてきます（**図４**）。

年齢別の事故発生状況

年齢別の事故種別ごとの構成割合では、例えば０歳は、窒息・誤飲の割合が高くなっている一方で、年齢が上がるごとに転倒の割合が高くなっていることがわかります。乳幼児の年齢に合わせて、注意する事故も変わります。注意すべき事故がわかったら、別添えの事故防止のポイントを見て、事故を未然に防ぎましょう！

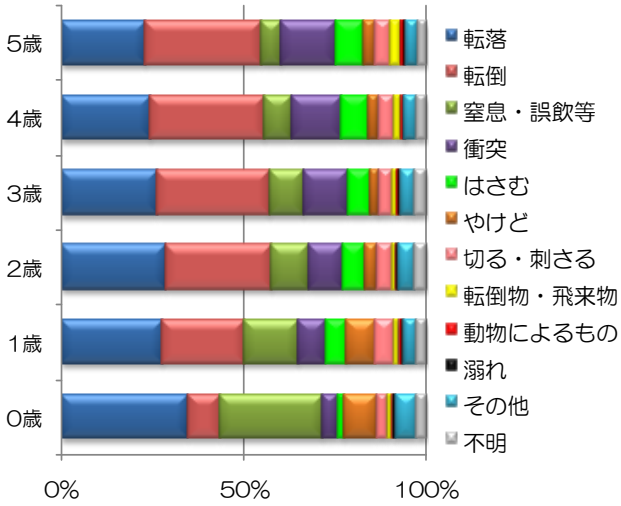

図５　年齢別の事故種別ごとの構成割合

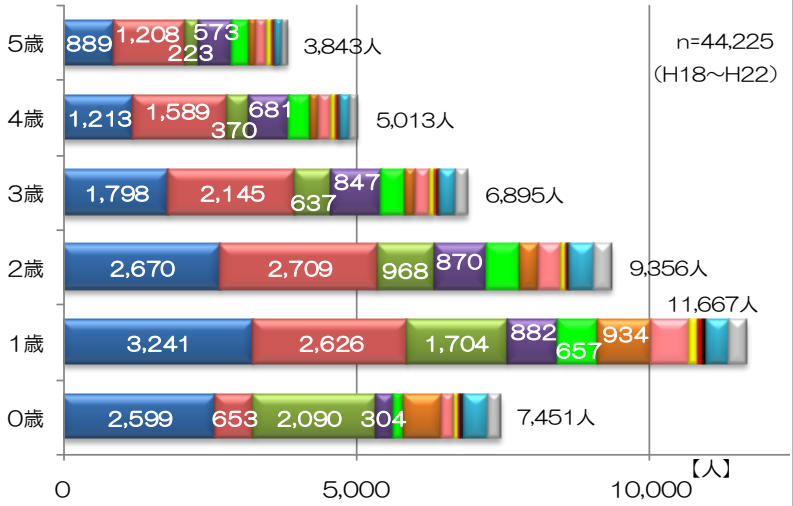

図６　年齢別の事故種別救急搬送人員

転落、転倒による事故が多く、やけど、溺れは重症化しやすい

事故を種類別に分類すると、ほとんどが転落（約２８％）と転倒（約２５％）で、この２つで全体の半分以上を占めています（**図７**）。

初診時程度が中等症以上（入院を要するような程度）と診断される割合でみると、やけど（約１４％）や溺れ（約６２％）は他に比べて高くなっています。特に溺れは、高い値となっています。

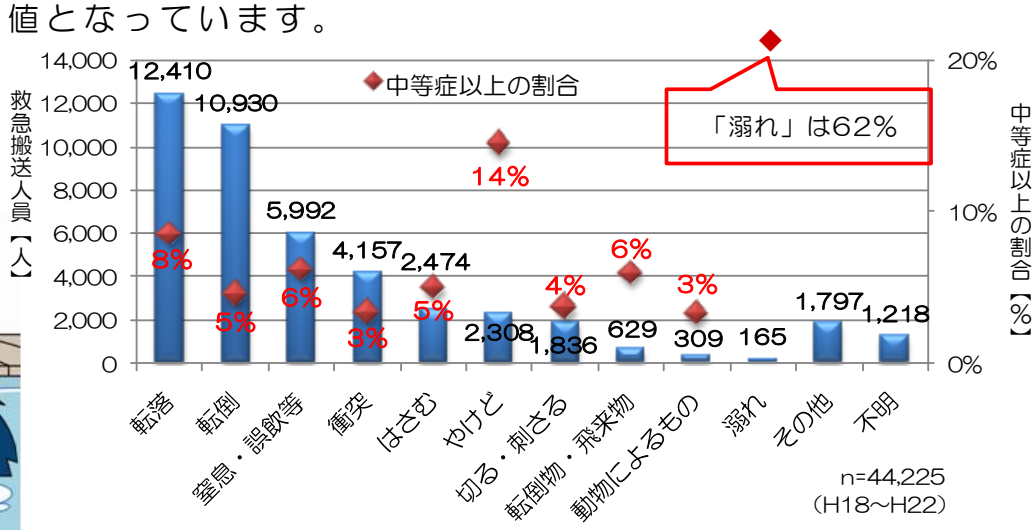

図７　事故種別ごとの救急搬送人員と中等症以上の割合

大けがを負いやすい事故

事故の発生状況を、事故に関係した製品・場所と、事故種別で見てみると、Ａ群に見られるような発生件数は少ないものの**大けがを負いやすい**（初診時に中等症以上と診断された割合が高い）**事故**、Ｂ群に見られるような発生件数は多いものの中等症以上の割合の少ない事故、また件数も少なく中等症以上の割合の少ないＣ群の事故に分かれる傾向があります（**図８**）。事故の発生しやすいものや、大けがになりやすい事故を具体的に把握して、乳幼児の痛ましい事故を減らしましょう。

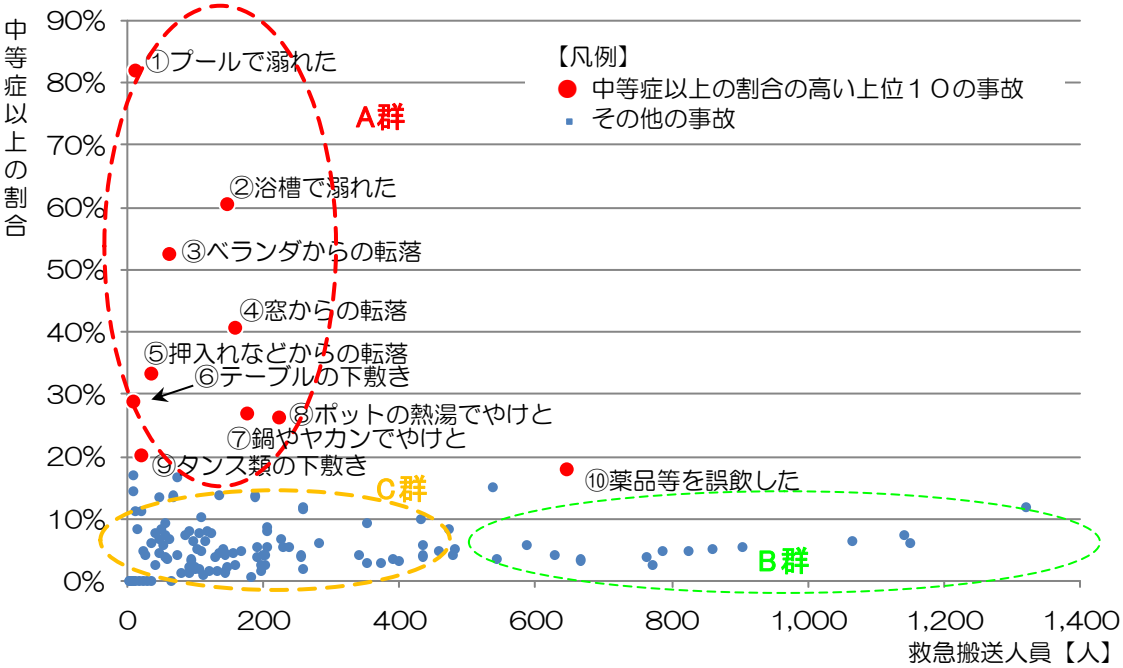

図８　事故の救急搬送人員と中等症以上の割合の関係

発生件数の多い事故、大けがを負いやすい事故

特に注意が必要な４種類の事故の年齢別の救急搬送人員と、中等症以上の割合は下図のとおりです。年齢の違いによる事故の傾向がわかります。

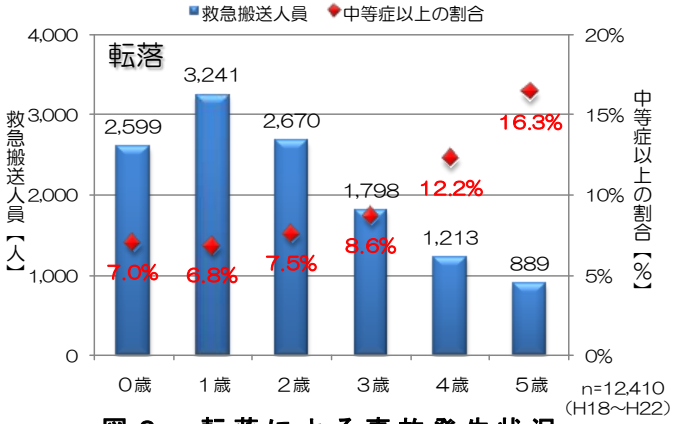

図９　転落による事故発生状況

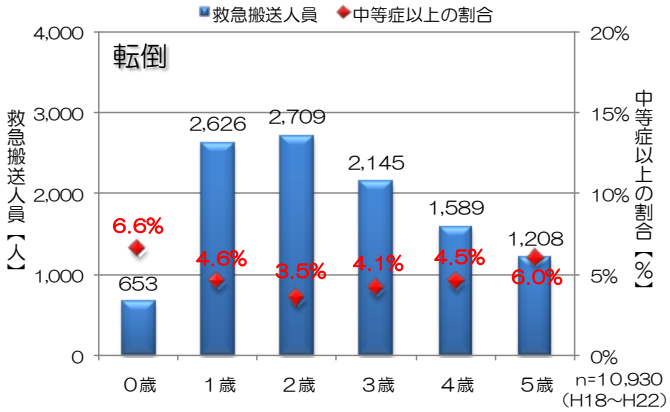

図 10　転倒による事故発生状況

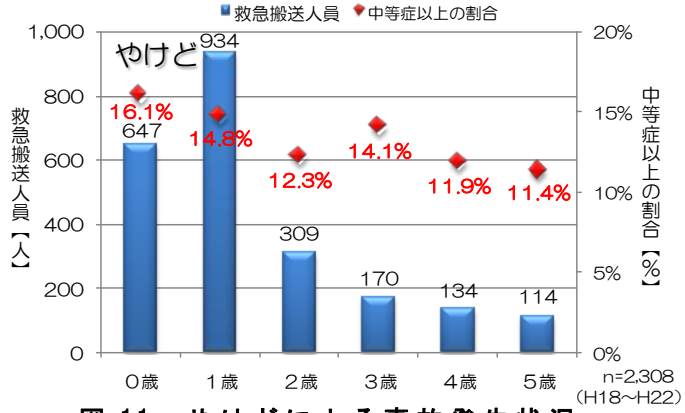

図 11　やけどによる事故発生状況

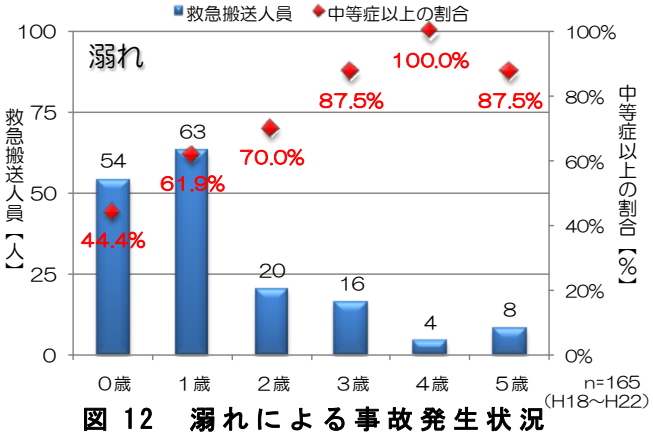

図 12　溺れによる事故発生状況

分析データ　平成 18 年から平成２２年までの救急搬送データにおける都民生活事故（一般負傷、運動競技事故、自然災害事故、水難事故）に該当するデータ

分析対象　上記データにおける 0～5 歳児（乳幼児と標記）

事故種別の定義　転落：高低差を伴って受傷したもの、転倒：高低差を伴わず受傷したもの、窒息・誤飲等：食物または、食物以外のものを飲み込んで受傷したもの（目、耳、鼻に異物が入ったものを含む）、衝突：人と人、人と物との衝突により受傷したもの、はさむ：物体間または物体内に挟まれたもの、やけど：高温の液体・気体等で受傷したもの、切る・刺さる：刃物や鋭利物等により受傷したもの、転倒物・飛来物：倒れてきたもの、おちてきたもの、飛んできたもの等で受傷したもの

初診時程度の定義　軽症：入院の必要がないもの、中等症：生命に危険はないが、入院の必要があるもの、重症：生命に危険があるもの、重篤：生命の危険が切迫しているもの

もっと詳しく知りたい方は
東京消防庁ホームページへ
「救急搬送データからみる乳幼児の事故」
冊子版がダウンロードできます。
http:www.tfd.metro.tokyo.jp/

【問合せ先】

東京消防庁防災部防災安全課
〒100-8119　東京都千代田区大手町 1-3-5
TEL　03-3212-2111(内線 4206)
FAX　03-3212-6429
E-mail bouanka1@tfd.metro.tokyo.jp

救急車? 病院? 迷ったら
救急相談センター　24時間対応 年中無休
#7119
急な病気やケガをした際に「救急車を呼んだ方がいいのか?」「病院へ行った方がいいのか?」迷ったら、救急相談センターをご利用下さい。
その他の電話、またはつながらない地域の場合は…
２３区　03（3212）2323
多摩地区　042（521）2323
東京消防庁　東京都医師会　東京都福祉保健局